歩みの風

明石市立錦城中学校
第73回生　学年通信
第74号
平成30（2018）年
5月21日（月）

なぜトライやる・ウィークを実施するのでしょう？

18日金曜日、多くの人が事前訪問に行きました。本番まで後2週間。だんだんせまってきましたね。さて、今更なんですが、どうして中学2年生は『トライやる・ウィーク』を実施するんでしょうか？1年生の1月にお話をしたと思いますが、改めてその目的をみなさんにお話しておきたいと思います。大きな目的は次の3つです。

①新しい経験、新しい出会いを通してして、成長する。

②仕事をすることを体験し、将来の自分について考える。

③社会と接することで、社会のマナーやルールを学ぶ。

①については・・・学校を離れた校外での活動、学習になりますので、普段は経験できないような体験をしっかりしてきてほしいと思います。

1年生の時に、インスタントラーメン発明記念館に行ったり、オーケストラを聞きに行ったりしました。またハチ高原にスキー実習に行きました。同じように学校では出来ない体験をしてきましたね。トライやるでも日頃できないような体験をしっかりしてきてほしいと思います。

そしてトライやるでは新たな経験と共にたくさんの人との新たな出会いがあると思います。事業書の方、また事業書と関わりのある方、その多くは大人の方になると思います。普段の生活での身近な大人といえば、お家の方や学校の先生になるのではないでしょうか。普段接する機会の少ない大人の方との出会いを大切にし、多くのことを学んでほしいと思います。そして、多様な考え方があることを知って欲しいと思います。

②については・・・実際に仕事を体験し、仕事をされている方々と接することで、働くことについて考えてほしいと思います。

働く事はお金を稼ぐこと、現代人にとっては生活をする、生きていくためのものでもだけではなく、今、自分達が生きている社会と関わっていくためのものでもあります。仕事は役割という言葉に置き換えることができるかもしれません。皆さんがお世話になる事業書の方はどんな役割をこの社会のなかで果たしておられるのでしょうね。考えてみましょう。また皆さんは将来、この社会でどのような役割を担っていくのでしょう。このトライやるの活動を通して、少しでも考えて欲しいと思います。

③については・・・いずれ、みなさんはこの社会で生活していきます。今も生活しているわけですが、今はまだお家の方の保護の下にいます。将来、自分一人で生活したり、結婚して、家族を持ったりして、今の保護者の方とは違う形で社会の中に加わっていくでしょう。

トライやる・ウィークで関わってくださる方々は社会の先輩です。先輩方はどのように社会と関わっておられるのでしょう?また何を大切にしておられるのでしょうか?その行動や考え方を間近で感じてもらって、社会というものを知って欲しいと思います。

3年生になると、具体的な進路先を考えていかなければなりません。1年生ではまだまだ小学生気分が抜け切れていません。なので2年生という中学校生活ど真ん中の中で、トライやる・ウィークを体験し、社会のこと、自分の将来のことをよく考えるきっかけにしてほしいと思います。そのために、この時期にこんな取り組みがあるということをよく認識しておいてください。

『努力することにうそはない』

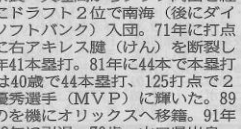
18日の夕刊に門田博光さんのお話が出ていました。引退されたのが、92年ですから、もう26年も前なんですね。職員室の先生方でもその勇士を知らないかも…。元祖フルスイングと言ってもいいかも知れませんね。丸い体でバットをメチャメチャ振り回していたのが印象的でした。活躍している姿しか知りませんでしたから、中学、高校では1本もホームランを打てなかったなんて意外です。ついつい私も自分は駄目だ、自分にはできない…とすぐにあきらめてしまうところがあります。また、親となって自分の子どもに「こいつは駄目だなぁ…」と思ってしまいます…。あきませんねぇ。「しっかりせんかい!!」と、言われたような記事でした。皆さんも明後日からの中間テスト、あきらめずに、頑張ってください。

18日（金）
神戸新聞夕刊より

名球会リレーコラム <32>

門田博光氏

かどた・ひろみつ　奈良・天理高からクラレ岡山を経て1970年にドラフト2位で南海（後にダイエー、現ソフトバンク）入団。71年に打点王。79年に右アキレス腱（けん）を断裂したが、翌年41本塁打。81年に44本で本塁打王。88年は40歳で44本塁打、125打点で2冠王と最優秀選手（MVP）に輝いた。89年、球団が譲渡されたのを機にオリックスへ移籍。91年からダイエーに移り、92年に引退。70歳。山口県出身。



バットと手が合体 振り続けた

子どもの頃の憧れはプロ野球、パイロットに大相撲の力士。でも中学、高校時代は本塁打を1本も打てなかった。それがプロ野球では歴代3位の567本塁打。170㌢の体で非力。補欠の器の選手が、過程は苦しくても、努力することにうそはないと突き抜けた。そこまでやれた満足感と、一方で600本打てたのに何でやめたのか今でも満足できない自分がいる。

当時はセのGマーク（巨人）とパのHマーク（南海＝現ソフトバンク）が輝いていた。Gマークはすごいメンバーがそろい、ナンバーワン（王）やナンバーリー（長嶋）が1人で2人分の活躍をした。僕ら外野手の要件は厳しく、打率3割、20本塁打は当たり前。プロ2年目に一本足打法にして3割、31本を打ち、打点王にもなったけど、うれしいとも思わなかった。

ホームランはむちゃ振りしなくても打つコツがある。とにかく気が狂うぐらいバットを振っていると、スイングの音が変わる時がある。ブンじゃなく、鳥肌が立つような音。真空状態で回ったような、言葉に表せない音。それを聞くために夜中の3時ころまでバットを振った。手のつぶれたまめも気にならず、バットのぬくもりと手が合体するような感覚。それでいて、周りの人からそのスイングは速くは見えない。

とことん自分を信じて頑張ってみる。今はみんな早く判断し過ぎる。親御さんがまず駄目。今は補欠でも抜き返すという教育が家庭でできていないと思う。

1979年2月に右アキレス腱（けん）断裂で入院した。バチーンと音がして目の前が真っ暗になった。病院の寝台を拳で殴ったのを覚えている。でも、その時にたくさん本を読んで考え方が変わり、余裕もできた。

断裂の前年からウエートトレーニングを積極的に取り入れ、復帰後、80年に41本塁打など結果に表れた。当時、ウエートトレーニングは筋肉が硬くなるからご法度だった。だから独特の体操で筋肉をほぐした。重さ1㌔の重いバットを振り切る体力がつくと、飛距離はさらにグンと伸びた。

90年には近鉄のルーキーの野茂投手から第1号本塁打を打ちたくて朝5時半から自宅近くのゴルフ場をラウンドした。92年の引退は冗談で記者に「老衰」と言った。まさか、それが本当になるとは…。

（元南海選手）



現役時代の門田博光氏

◇原則月1回掲載します。